

移住者と地元住民のローカルルールに対する認識の違いに関する研究

～梶原町における移住者と地元住民の場合～

1170383 青木隼人

高知工科大学マネジメント学部

1. 概要

近年、地方移住者が増えているが、定住せずにまた移住してしまう人がある。本研究では別の場所に移住してしまった人は分からないため、梶原町のすでに定住した人に注目し、調査した。その結果、梶原町には移住者にはよくわからない取り決めがあることがわかり、これをローカルルールと名付け、何故地元住民はローカルルールを移住者に教えないのかを地元住民に聞いた。そこで移住者にはよくわからない取り決めに見えるローカルルールが、地元住民には当たり前として認識されているため見えないことが判明した。そこで、どのようなローカルルールがあるのか、また住民はどのくらいのとっているのか追加調査し、移住者と地元住民のローカルルールのズレが地元住民の移住者支援に困難をきたしていることを示した。

2. 背景

2.1 社会的背景

近年、地域を志向し地域を大切にしたいという人が増えてきており、そういった人がI・Uターンで地方に移住するケースが増加傾向にある。

しかし、地方へ移住してもその場所に定着せずにすぐにまた別の場所に移住してしまう人がある。また逆に一度移住した場所に定着そこで暮らしていく人もいる。

何故同じ地方移住した人でもこのような違いが出るのか、また何故すぐに別の場所へ移住してしまうのか疑問が生まれた。

しかしながら、すでに別の場所へ移住してしまった人がどこへ移住したのかは分からない。そのため、既に定住している人に注目した。

2.2 学術的背景

これまで中山間地域や田舎に移住し、定住するまでのケースについて多くの研究者のよって研究がされてきた。【1】岡田憲夫・河原利和（1997）では、I・U・Jターンで地方への移住者が継続的に入っていることを示している。また移住者の

参入条件を（1）受け入れ方の魅力的な暮らし。地元住民自らが住む地域をデザインし作り上げていること（2）移住者が受け入れ側に感じる魅力。そこに住んでみたい、地域に参加したいと主体的な選択を志向していること（3）移住者と地元住民の波長の一致。摩擦を起こしつつも両者のニーズを一致させ、何ができるのか、何がしたいのかを見出すこと（4）チューニングチャンネルの存在。閉鎖的な中山間地域に移住者が参入するため、地元と移住者を仲介する役割を担う存在が必要（5）チューニングチャンネルの多様さ。仲介方法は一つではなく多いほど移住者の参入は多い（6）移住者参入の構図。移住者、受け入れ側、仲介役、これら三つが組み合わさることで移住者参入のシステムが構築される。以上の条件を必要としている。また、移住者の地域への参入過程時には（1）行政は移住者を選択しないこと（2）受け入れ側は移住者を特別扱いしないこと（3）受け入れ側は移住者を束縛しないこと（4）移住者に対するアフターケアが必要としている。【2】筒井一伸・佐久間康富・嵩和雄ら（2015）は、農山村の課題としてコミュニティをあげている。農山村等の地域社会は閉鎖性があり、それへの対応が必要とすると提唱している。そのためには外部からくる人材（ヨソモノ）に対して地元住民が意識的に「交流」を仕掛ける必要があるとし、「交流」を積極的にしている農山村は移住者の受け入れがスムーズであると示している。逆に「交流」をしなければ移住者受け入れのノウハウが蓄積されず、受け入れが難航する。そして交流から移住というプロセスを積み重ねていくことにより地域社会の閉鎖性が軽減され、地域づくりに不可欠なヨソモノの受け入れという質的意義を踏まえた「田園回帰」展開が実現するとしている。【3】西村亮介・嘉名光市・佐久間康富ら（2015）は移住者と地元住民の関係について3つの期間に分けることができることを明らかにした。関係萌芽期：移住者受け入れ期間。関係形成期：委員会を設立し、組織的な移住者の受け入れ期間。関係成熟期：委員会の会長・役員にも移住者が就任し、地域の担い手として位置づけられる期間の3つである。

またその期間の移住者と地元住民の意識から見る関係は、移住初期、関係萌芽期では地元住民にとって「異質な存在」であったが、関係形成期では、移住者による積極的な地区運営活動に対して地元住民が「ともに地域を担う関わる存在」になり、関係成熟期は移住者は地元住民から、地元住民は移住者から学ぶような「ともに地域を担う関係」に変遷するとした。そして、各関係期において移住者が地域づくりに参加できる機会があり、移住者を中心とする活動のなかでも地元住民の歩み寄りがあることでともに地域にを担う関係になることも確認している。移住者、地元住民がともに参加できる場、地元住民の歩み寄り、継続的な関係形成の取り組みが両者を地域を担う関係性に発展するために重要であるとしている。

これらの研究は移住者と地元住民の関係性、地元住民の受け入れ条件や地元住民の移住者の受け入れのプロセス、移住者と地元住民の関係性の変遷を表したものである。しかし、これらの研究は全て移住者が地方に定住するための条件や移住者と地元住民との関係性について論じているものであり、実際に現実として移住者が定住するまでに地元住民との間にどのような困難があったのか、またあるとすれば具体的に何があるのか、を研究したものはない。そこを解明すれば、移住者がすぐにまた別の場所へ移住してしまうことが少なくなり、移住者が定住するまで地元住民との関係をスムーズに持てるのではないと思われる。そこで本研究は地方の中でも高知県梶原町の住民に焦点を当て、移住者と地元住民の間であった困難について具体的に何がなるのかを研究した。

3. 予備的研究

調査方法は実際にインタビューを行いいき、インタビュー内容を IC レコーダーで録音した。インタビューは 2015 年 9 月と 12 月にそれぞれ約 2 時間ずつ行った。

このインタビューの目的は、移住者が定住するまでに困難だったことは何か？を聞く事である。

対象者は朝田氏（仮名）。女性で出身地は須崎市、職業は保健士をしている。

予備的研究を行う目的は移住者から定住するまでに困難だった事を聞くことで、困難なことの根本にある課題は何かを見つけるためである。

3.1 朝田氏略歴

朝田氏は現在 28 歳。高知県立大学看護学部に入學。大学の

講義でマグネティズムという考え方を知る。マグネティズムとは明確に定義されているものではないが、増野園恵 (2013) の中では「質の高いケア提供が可能であることで仕事に満足する看護職を引きつけ、とどめるもの」と紹介されている。つまり、何故人が辞めてしまうのか？ではなく、どうして人は辞めないのか、というところに注目した考え方である。大学 4 年時、保健師と看護師両方の資格を取得していたためどちらに就職するか悩むが、大学の教授に勧められて、梶原町の役場に保健師として就職する。(表 1)

梶原町に引越した二日目、日曜日で役場がしまっていたため開いている店が分からず、迷っていたところ和田島屋という雑貨屋にたどり着きそこでアイカードという梶原だけで使えるカードの存在を知る。移住から二年間は、地域包括支援センターに配属され、主に高齢者の対応をした。(表 2)

表 1 朝田市の学生時代

学生時代	・高知県立大学看護学部に入學
	・授業でマグネティズムという考えを知り、どうして人はやめないかというところに注目し、研究する
	・看護師になるか保健士になるか迷う
	・大学の教授に勧められて、保健士として梶原町役場に就職する

表 2 朝田氏の梶原移住時から現在まで

梶原移住時 〜 現在	・移住二日目に和田島屋という店でアイカードという梶原だけで使えるカードの存在を知る
	・移住から2年間は、地域包括支援センターに配属され、主に高齢者の対応をした

3.2 予備的研究結果

3.2.1 予備的研究結果 1 エピソード 1

朝田氏が梶原町に移住して最初の春に花見のお誘いがあった。その頃の朝田氏は移住してきたばかりで忙しくやむを得ず事情でお誘いを断った。その後 6 月に一斉清掃の案内があった。

朝田氏「一斉清掃の後に慰労もやるのでぜひ来てくださいという案内が（中略）ポストに入っていて（中略）〈前回の〉花見出てないから行きづらいなって（中略）デビューを出遅れちゃった感じがするし」

この言葉から分かることは、朝田氏は地域の人が行事に出られなかった場合にどのように埋め合わせをするのかわからず、精神的に追い詰められているということである。

3.2.2 予備的研究結果2 エピソード2

前回の花見を欠席している朝田氏は一人で一斉清掃に行くのは心細く朝田氏と同じく花見に行っていない同期の人と職場の先輩を誘う。ゴミ袋と軍手ぐらいで良いと軽く考えて一斉清掃に行った朝田氏。しかし、梶原町の一斉清掃は鎌や芝刈り機つかった本格的なものだった。

朝田氏「ゴミ袋と手袋ぐらい軍手とか持っていけばいいかなって思ったらみんなこう草刈り機とか鎌とか（中略）草引き程度とかゴミ拾う程度とかのはなくて（中略）ちょっと準備が、何しに来たんが、こいつみたいな雰囲気すごい」

朝田氏は地域住民から強い視線を感じ、自分は地域から浮いていると感じた。ここから朝田氏は一斉清掃の時にどのような準備が必要かわからなかったために精神的に追い詰められていた。

4. 本研究の目的

エピソード1、エピソード2からわかるように朝田氏は地元に関して何をすべきなのか分からず、精神的に追い詰められている状況だった。ここから一つの疑問が浮かび上がり、本研究の目的が定まった。何故朝田氏の周囲の地元住民は朝田氏に対して何もフォローをしなかったのだろうか？これは何が起因しているのか。地元住民の不親切さなのか？地元住民には排他性があるのだろうか？などいくつかの仮説が考えられる。この問をこれから明らかにしていく。

5. 研究方法

研究目的である何故朝田氏の周囲の地元住民は朝田氏に対して何もフォローをしなかったのだろうか？を解明するためには移住者は何故そのようなことを知ることができなかったのか、また地元住民は何故助けることが出来なかったのかを理解する必要がある。これらを理解するには移住者と地元住民双方に話を聞く必要性があったのでそれぞれインタビュー

をした。

移住者の研究対象者は宇田氏。女性であり、梶原町社会福祉協議会に勤めている。宇田氏は数年前に梶原町に移住した。朝田氏と同じく移住者であり、共通する不安の有無があるのかを調査する。

地元住民の対象者は那智氏。男性であり、職業は大工をしている。那智氏は朝田氏と宇田氏、両者と親しく面識があるので対象に決めた。

5.1 宇田氏の略歴

宇田氏は現在25歳。高知市出身。高知県立大学に入学。大学一年生のときに先輩に誘われ土佐町のお祭りに参加し、そこで宇田氏の憧れの人となる土佐町の社会福祉協議会の事務局長と出会う。大学3.4年時に梶原町の立ち上げの会議に参加し、梶原町長の思いに感じ入り、梶原町社会福祉協議会に就職を決める。（表3）

梶原町に就職当時は仕事が辛くて週2.3日以上春野町の実家に帰る生活を続ける。同じ移住者から消防団への勧誘を受け自分の仕事柄住民と関わる必要があり、消防団員にお世話になったこともあり消防団に入る。消防団の研修に幹部の人から誘われ、淡路島と京都の福知山に研修に行く。現在は社会福祉協議会の活動でワークショップや地域福祉の仕事をしている。（表4）

表3 宇田氏の学生時代

学生時代	・高知県立大学に入学
	・大学一年生時に土佐町のお祭りで憧れの人となる土佐町の社会福祉協議会の事務局長に会う
	・大学3、4年の時に梶原で社会福祉協議の立ち上げ会議に参加
	・梶原町の社会福祉協議会に就職

表4 宇田氏の梶原移住時から現在まで

梶原移住し現在	・就職当時は仕事が辛くて週2、3日春野町の実家に帰る
	・同じ移住者に誘われて消防団に入る口
	・消防団の研修で淡路島に行く口
	・社会福祉協議会の活動として現在はワークショップなどを行っている

6. 研究結果

宇田氏に行ったインタビューの中から一つのエピソードが出た。

宇田氏「知り合いの人から聞いたのは『あの人は挨拶はなんちゃあせん』みたいなことを言われてるよ（中略）注意しちよきなよって（中略）聞いて（中略）伝えたら部落会のお菓子持ってって挨拶して、まあ受け入れてもらった」

この言葉から梶原町に移住してきてから、人と会った時に挨拶をしなかった人が、言伝で挨拶をしなければ周囲から孤立してしまうことを伝えられ、後日の部落会でお菓子を持参し改めて挨拶することで部落から受け入れられたことが分かる。このエピソードからわかることは梶原町では人と必ず挨拶をしなければならないということである。また挨拶のような人間関係に関する慣例を破った場合には、関係を修復するための対処をしなければならない、ということである。

朝田氏・宇田氏のインタビューから次の二つの取り決めが判明した。

- ・ 梶原では地域行事にでなければいけない
- ・ 挨拶のような人間関係に関する慣例を破った場合には、関係を修復するための対処をしなければならない

このような梶原町には移住者にとってよくわからない取り決めがあることを発見した。このような地域特有の取り決めのことをここではローカルルールと呼ぶ。ローカルルールは辞書「大辞林」には「ローカルルールとは限られた特定の場所だけで適用される規則」と示されているが、ここでは、「ある特定の地域に元から住んでいた人にとっては常識として特段意識しないが、別の人、例えば移住者にとっては規則に見えるものごと」と定義し、使っていく。

このようなローカルルールを地元住民が移住者におしえることはないのか那智氏にLINEで尋ねた。

青木「移住者のひとが梶原のローカルルールにビックリしたことにはビックリことはありますか？」

那智氏「あるといえば、あります。それがどんなローカルルールだったかわ、覚えてない（中略）基本的にローカルルールの基準がないのかも（?_?）それが、当たり前だと思ってるからねえ」

那智氏の言葉から移住者には見えるローカルルールが地元住民には当たり前であるとして見えていないことがわかる。

つまり、地元住民はローカルルールを当たり前＝常識として認識している。

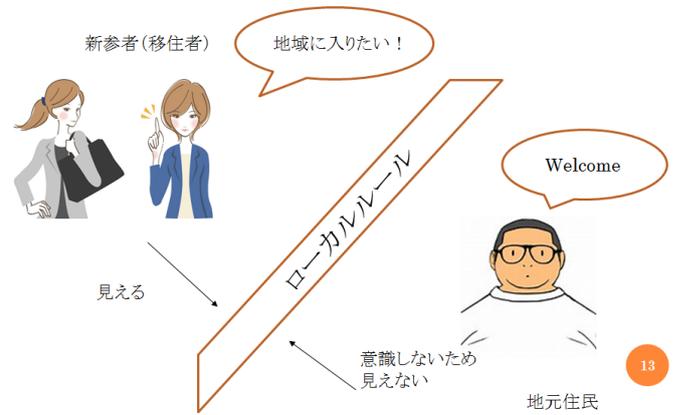


図1 移住者と地元住民のローカルルールの見え方の違い

図1は地元住民は移住者を受け入れようとはしているが、地元住民にはローカルルールが意識しないため見えず、移住者がなにがわからないかわからない、というジレンマができていることを示している。つまり、何故朝田氏の周囲の地元住民は朝田氏に対して何もフォローをしなかったのか、という問いに対して、朝田氏はローカルルールがどんなものであるか分からずに戸惑っているが、地元住民はローカルルールを常識として認識しているため、朝田氏がなにがわからないかわからないためフォローできない、と結論づけることができた。

7. 追加的研究

研究結果から地元住民と移住者がローカルルールに対してそれぞれ見え方が違うことが判明した。そのローカルルールについて調べる必要があると考え、追加的に研究をした。

7.1 追加的研究目的

移住者と地元住民の間にあるローカルルールがそれぞれの認識によって壁になっていることは研究結果からわかっている。では梶原町にはどのようなローカルルールがあるのか？また、梶原町住民はのうちどのくらいがそのルールにのっとっているのか？この二点を追加的研究の目的とする。

7.2 追加的研究方法

研究目的を達成するために住民を梶原町外から来た移住者、生まれも育ちも梶原である地元住民、生まれは梶原だが一時

期梶原町外で暮らしていても梶原に戻ってきた出戻り住民の3種類に分けて9つのローカルルールに関するアンケート調査(表5)を行なった。

表5 アンケート調査結果

番号	ローカルルール	このローカルルールに従っていると答えた人の比率
1	アイカードという梶原町だけで使えるカードがある	6人/8人
2	電話帳にIP電話の電話番号と通常の電話番号が載ることになっている	6人/8人
3	社会的地位が高く飲める人・社会的地位が低くても酒が飲める人は奥に席が用意される	4人/8人
4	ゴミ袋に自分の名前を書かなければ持って行ってくれない	8人/8人
5	本戸、協力戸で払うべき部落費が異なる	8人/8人
6	日常会話の中で旧地名が用いられる	8人/8人
7	消防団員になれば優先的にその仕事をしなければならない	4人/8人
8	粗大ごみは住民自らがゴミ処理場に持って行かなければならない	8人/8人
9	地域行事に出ることが暗黙の了解である	7人/8人

7.3 追加的研究結果

アンケート表から同じ梶原町の住民でもどんなローカルルールがあるのか?という認識は違うということがわかる。アンケート者全員が知っているローカルルールもある一方で、半分の人にしか知られていないローカルルールもある。これはおそらく同じ梶原町内でも地域によって特定のローカルルールが適用されたり、されていなかったりしているのではないかと推測できる。

8. まとめ

本研究から移住者は定住する過程の中でローカルルールの存在を認識するような出来事に出会う。しかし、移住者はそれがどのようなものかわからないため、精神的負担となっている。一方で、地元住民はローカルルールの存在は知っているが、ローカルルール=常識であると認識しているためいしきしない。そのため地元住民は移住者が何がわからないかわからない、というジレンマが生まれている。こうした移住者と地元住民のローカルルールに対する認識のズレが地元住民による移住者の定住支援を困難にしている。

本研究で特定したローカルルールがあることを移住者・地元住民双方に提示していくことが認識のズレを解決する重要な手段となる。

9. 参考文献

- 【1】岡田憲夫・河原利和(1997)「交流時代における中山間地域の外部者参入過程に関する実証的研究—ハビタント概念の例証—」The Journal of Experimental Social Psychology. Vol. 37 No. 2 pp223-249
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjesp1971/37/2/37_2_223/_pdf
- 【2】筒井一伸・佐久間康富・嵩和雄(2015)「都市から農山村への移住と地域再生—移住者の起業・継業の視点から—」農村計画学会誌 Vol. 34, No. 1
https://www.jstage.jst.go.jp/article/arp/34/1/34_45/_pdf
- 【3】西村亮介・嘉名光市・佐久間康富(2015)「過疎地域の地区運営活動における地元住民と移住者の関係の変遷に関する研究—和歌山県東牟婁郡那智勝浦町色川地区を事例に一」都市計画論文集 Vol. 50 No. 3 pp. 1303-1309
https://www.jstage.jst.go.jp/article/journalcpj/50/3/50_1303/_pdf
- 【4】増野園恵(2013)「看護におけるマグネティズムの概念分析」UH CNAS, RINCPC Bulletin Vol. 20
<http://lib.laic.u-hyogo.ac.jp/laic/5/kiyo20/20-01.pdf>